# 加速度制限付最速誘導制御と実験による評価

Fastest Guidance Control with Acceleration Restriction and Experiment Evaluation

○ 向野 政紀(福井大) 見浪 護(福井大)

Mamoru MINAMI, University of Fukui, Bunkyo3-9-1, Fukui Masanori Mukono, Graduate school of engineering, University of Fukui, 3-9-1, Bunkyo, Fukui, 910-8507, Japan

Force and torque induced by traveling motion of a mobile robot effect dynamically to the objects being carried on it. If the induced force and torque should be bigger than the static friction force and torque exerting between the carrying objects and the mobile robot, the carrying objects start to slip on it. Since this slipping motion causes increasing the acceleration of the mobile robot, then the slipping of one object leads to dangerous collapse of all carrying objects. Furthermore it interferes with accurate traveling motions. On the other hand, mobile robots are desired to transfer the carrying objects as fast as it can. On this view point of cantradcted requirements, this paper purposes a controller to guide the mobile robot along a given course as fast as possible with acceleration restriction not to slip the carrying objects during traveling.

Keywords : Mobile Robot, Carrying Object, Slipping, Guidance Method

## 1 緒言

ロボットが移動する際,積載物には遠心力などの慣 性力が働く.積載物に働く摩擦力と慣性力がつりあって いる時は積載物は静止しているが,慣性力が最大静止摩 擦力を超えてしまうと積載物は滑り始める.積載物に滑 りが生じることで,積載物の落下もしくは移動ロボット のふらつき・転倒の原因となってしまう.さらにそれら が原因で,積載物の破損や人間の怪我など二次的な被害 につながる可能性もあり,非常に危険である.積載物の 滑りを防止する手段として,ベルトやロープなどで積載 物を固定する方法があるが,その分手間が掛かってしま い作業効率の低下につながる.

また最近の搬送作業を行うロボットの研究では,食事 搬送ロボットシステムの開発を目指した研究[3]やオフィ スビル内における移動ロボットによるゴミの搬送システ ムについての研究がある.

ロボットの走行を制御することで積載物の滑りを防止 し,積載物を固定することなく搬送作業を行うことがで きる.そのことで上記のような危険性をなくすことがで き,安心して作業を行うことが可能になる.また積載物 を固定する手間や作業人員の削減など,コストを抑える ことができ,作業効率が上昇する.

本研究では,移動ロボットの走行や制御が積載物に対 してどのような影響を及ぼすかを調べることを目的とし, まず搬送作業を行う移動ロボットのモデリングを行う.さらに,積載物を滑らせないという制約の中で,最速で誘 導走行する制御法を提案する.ここで,加速度センサなど の外界センサを用いて,積載物の慣性力を測定すること で滑りを防止する方法も考えられるが,本手法では提案 したモデルを用いることによって加速度センサが不用な 加速度制限方法を提案する.この誘導制御は目標走行軌 道に依存した方法ではないため,任意な目標軌道を与え ても有効に加速度を制限し,積載物に作用する慣性力を 最大静止摩擦力以下に保つことができる方法である.こ の誘導制御により積載物を滑らせずに目標軌道に収束し 最大許容速度で走行することをシミュレーションおよび



Fig. 1: Mobile robot on the standard of coordnates

実機による走行実験により示すことで,提案手法の有効 性を確認する.

### 2.1 積載物の運動方程式

リンク 0 上に m 個の積載物があり、その内 p 個が滑り 移動をしていて、残り q(=m-p) 個が静止している場 合について考える.まず、滑り移動をする p 個の積載物 の運動方程式を求める、滑り移動している p 個の積載物 に番号をつけ、 $j(=1, \dots, p)$  番目にあたる積載物  $S_j$  は  ${}^{W_{x_s}}, {}^{W_{y_s}}$ 方向の並進運動と、 ${}^{W_{z_s}}$ 回りの回転運動という 三つの自由度を持つリンクと考えることができるから、 その加速度  ${}^{W_{P_{W,Sj}}}$ ,角加速度  ${}^{W_{\omega_{Sj}}}$  は

$$\begin{split} & \overset{W \dot{\boldsymbol{P}}_{W,Sj} = \overset{W \dot{\boldsymbol{P}}_{W,0} + \overset{W }{\mathbf{R}_0} \overset{0}{\boldsymbol{P}}_{0,Sj} + 2\overset{W }{\boldsymbol{\omega}}_{0} \times (\overset{W }{\mathbf{R}_0} \overset{0}{\boldsymbol{P}}_{0,Sj}) \\ & + \overset{W }{\boldsymbol{\omega}}_{0} \times (\overset{W }{\mathbf{R}_0} \overset{0}{\mathbf{P}}_{0,Sj}) + \overset{W }{\boldsymbol{\omega}}_{0} \times (\overset{W }{\mathbf{R}_0} \overset{0}{\mathbf{P}}_{0,Sj}) \}$$
(1)

$${}^{W}\!\boldsymbol{\omega}_{Sj} = {}^{W}\!\boldsymbol{\omega}_0 + {}^{W}\!\boldsymbol{R}_0 {}^{0}\!\boldsymbol{\omega}_{Sj} \tag{2}$$

$${}^{\prime\prime}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{Sj} = {}^{\prime\prime}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{0} + {}^{\prime\prime}\boldsymbol{R}_{0} \, {}^{\prime}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{Sj} + {}^{\prime\prime}\boldsymbol{\omega}_{0} \times ({}^{\prime\prime}\boldsymbol{R}_{0} \, {}^{\prime}\boldsymbol{\omega}_{Sj}) \tag{3}$$

と表される.ここで $\Sigma_{Sj}$ を積載物の重心に取り付けているので, ${}^W\ddot{P}_{W,Sj} = {}^W\ddot{P}_{W,GSj}$ となる.動摩擦力が $S_j$ に作用するときの滑り移動する積載物の運動方程式は,

$$m_{Sj} {}^W \ddot{\boldsymbol{P}}_{W,Sj} - {}^W \boldsymbol{f}_{Sj}^{\#} = \boldsymbol{0}$$

$$\tag{4}$$

$${}^{W}\boldsymbol{I}_{Sj}{}^{W}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{Sj} + {}^{W}\boldsymbol{\omega}_{Sj} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{Sj}{}^{W}\boldsymbol{\omega}_{Sj}) - {}^{W}\boldsymbol{\tau}_{Sj}^{\#} = \boldsymbol{0}$$
(5)

となる. $m_{Sj}$ は積載物の質量であり, ${}^{W}I_{Sj}$ は積載物の 慣性テンソルである.

次に,滑り移動していないq個の積載物について示す. 滑り移動している積載物と同様に番号をつけ,滑り移動 していない $k(=1,\dots,q)$ 番目の積載物 $S_k$ について考え る.ここで, $S_k$ とリンク0との間には静止摩擦力が作用 しているので,滑り移動していない積載物については次 のように表せる.

$$m_{Sk}{}^W \ddot{\boldsymbol{P}}_{W,Sk} - {}^W \boldsymbol{f}_{Sk}^* = \boldsymbol{0}$$
(6)

$${}^{W}\boldsymbol{I}_{Sk}{}^{W}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{Sk} + {}^{W}\boldsymbol{\omega}_{Sk} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{Sk}{}^{W}\boldsymbol{\omega}_{Sk}) - {}^{W}\boldsymbol{\tau}_{Sk}^{*} = \boldsymbol{0}$$
(7)

以上のことより積載物とリンク0との間に作用する静止 摩擦力が $|^W\!f_{Sk}^*| < |^W\!f_{Sk,max}|$ かつ $|^W\!\tau_{Sk}^*| < |^W\!\tau_{Sk,max}|$ の条件を満たしている間,積載物は式(6),(7)で表されるようにリンク0上に静止状態にある.しかし, $|^W\!f_{Sk}^*| > |^W\!f_{Sk,max}|$ または $|^W\!\tau_{Sk}^*| > |^W\!\tau_{Sk,max}|$ となった瞬間に積載物の運動を支配する式は式(4),(5)へと切り替わる.

## 2.2 積載物の運動を考慮した移動ロボットの 運動方程式

リンク0上に積載物が載っていない場合のリンク0の 運動方程式は,移動ロボットに固定された座標系  $\Sigma_0$ の 原点に加わる力とトルクを計算することで求められる.

$${}^{W}\boldsymbol{f}_{0} = m_{0}{}^{W}\boldsymbol{\ddot{P}}_{G0}$$

$${}^{W}\boldsymbol{n}_{0} = {}^{W}\boldsymbol{I}_{0}{}^{W}\boldsymbol{\dot{\omega}}_{0} + {}^{W}\boldsymbol{\omega}_{0} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{0}{}^{W}\boldsymbol{\omega}_{0})$$

$${}^{W}\boldsymbol{\sigma}_{0} = {}^{W}\boldsymbol{\dot{\mu}}_{0} + {}^{W}\boldsymbol{\dot{\omega}}_{0} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{0}{}^{W}\boldsymbol{\omega}_{0})$$

$$(8)$$

$$+ {}^{W}\!\boldsymbol{S}_{0} \times m_{0} {}^{W}\!\boldsymbol{\dot{P}}_{G0} \tag{9}$$

この運動方程式に積載物の影響を組み込む必要がある. 静止している q 個の積載物について考えると,リンク 0 の運動に従って積載物 Sk に発生している静摩擦  ${}^{W}f_{Sk}^{*}$ ,  ${}^{W}\tau_{Sk}^{*}$ は,

$${}^{W}\boldsymbol{f}_{Sk}^{*} = m_{Sk} {}^{W} \ddot{\boldsymbol{P}}_{W,Sk} \tag{10}$$

$${}^{W}\boldsymbol{\tau}_{Sk}^{*} = {}^{W}\boldsymbol{I}_{Sk} {}^{W} \dot{\boldsymbol{\omega}}_{Sk}^{*} + {}^{W} \boldsymbol{\omega}_{Sk}^{*} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{Sk} {}^{W} \boldsymbol{\omega}_{Sk}^{*})$$
(11)

であり,  ${}^{W} f_{Sk}^{*}$ ,  ${}^{W} \tau_{Sk}^{*}$ はリンク0の運動のみにより決定 される. 従って $S_k$ はそれ自身の運動方程式を持たず, リ ンク0の負荷として運動方程式に組み込まれる.また滑 りを発生した積載物 $S_j$ からリンク0が受ける外力は式 (4), (5)で表された  ${}^{W} f_{sj}^{\#}$ ,  ${}^{W} \tau_{sj}^{\#}$ である.

(4), (5) で表された  $W f_{S_j}^{\#}$ ,  $W \tau_{S_j}^{\#}$  である. 以上の準備により,積載物 $S_j$ ,  $S_k$  に加わる摩擦力を 考慮した移動ロボットの運動方程式は,

$${}^{W}\boldsymbol{f}_{0} = \sum_{j=0}^{p} {}^{W}\boldsymbol{f}_{Sj}^{\#} + \sum_{k=0}^{q} {}^{W}\boldsymbol{f}_{Sk}^{*} + m_{0}^{W}\ddot{\boldsymbol{P}}_{G0} \qquad (12)$$
$${}^{W}\boldsymbol{n}_{0} = \sum_{j=0}^{p} {}^{W}\boldsymbol{\tau}_{Sj}^{\#} + \sum_{k=0}^{q} {}^{W}\boldsymbol{\tau}_{Sk}^{*} + {}^{W}\boldsymbol{I}_{0}^{W}\dot{\boldsymbol{\omega}}_{0}$$







Fig. 3: Experiment image Fig. 4: Carrying object on the mobile robot

$$+ {}^{W}\boldsymbol{\omega}_{0} \times ({}^{W}\boldsymbol{I}_{0} {}^{W}\boldsymbol{\omega}_{0}) + m_{0} {}^{W}\boldsymbol{S}_{0} \times {}^{W}\boldsymbol{P}_{G0}$$
$$+ \sum_{j=0}^{p} {}^{W}\boldsymbol{P}_{0,Sj} \times {}^{W}\boldsymbol{f}_{Sj}^{\#} + \sum_{k=0}^{q} {}^{W}\boldsymbol{P}_{0,Sk} \times {}^{W}\boldsymbol{f}_{Sk}^{*}$$
(13)

と表される .  ${}^{W}f_{Sj}^{\#}$ ,  ${}^{W}\tau_{Sj}^{\#}$ を含む項は , 滑り移動する積載物とリンク 0 との干渉力を表す . ただし上式では ,  ${}^{W}f_{S0}^{\#} = \mathbf{0}$ ,  ${}^{W}f_{S0}^{*} = \mathbf{0}$ ,  ${}^{W}r_{S0}^{*} = \mathbf{0}$ ,  ${}^{W}\tau_{S0}^{*} = \mathbf{0}$  と定義する . 移動ロボットは ,  ${}^{0}x$ 方向の並進運動と  ${}^{0}z$ 回りの回転

移動ロボットは、 $\tilde{0}_x$ 方向の並進運動と $\tilde{0}_z$ 回りの回転 運動のみの自由度しかもたないこと、この二つの自由度 に対する移動ロボットの駆動力及び旋回トルクは、左右 駆動輪が発生すべき駆動トルク $\hat{\tau}_L, \hat{\tau}_R$ の和と差より求ま ることを考慮すると、これらのトルクと $Wf_0, Wn_0$ の間に は、次の関係

$$\frac{\widehat{\tau}_R}{r} + \frac{\widehat{\tau}_L}{r} = {}^W \boldsymbol{f}_0 {}^T {}^W \boldsymbol{x}_0 = f_0$$
(14)

$$\frac{T}{2}\left(\frac{\hat{\tau}_R}{r} - \frac{\hat{\tau}_L}{r}\right) = {}^W \boldsymbol{n}_0 {}^T {}^W \boldsymbol{z}_0 = \tau_0$$
(15)

が成り立つ. $\hat{\tau}_L, \hat{\tau}_R$ は連立方程式 (14),(15)の解として 得られる.左右駆動系の粘性抵抗を $C_L, C_R$ ,慣性モーメ ントを $I_{aL}, I_{aR}$ とすると,モータの発生トルク $\tau_L, \tau_R$ と  $\hat{\tau}_L, \hat{\tau}_R$ との関係は,

$$\tau_L = \hat{\tau}_L + I_{aL} \ddot{q}_L + C_L \dot{q}_L \tag{16}$$

$$\tau_R = \hat{\tau}_R + I_{aR} \ddot{q}_R + C_R \dot{q}_R \tag{17}$$

と求めることができる.式 (14), (15)の逆動力学計算の 中で  $f_0 \ge \tau_0 \bowtie^W f_0, {}^W n_0$ より求められたものであり,こ れらは  $V_0$ ,  $\dot{V}_0$ ,  $\omega_0$ ,  $\dot{\omega}_0$ を変数として含んでいる.

## 3 モデリングの検証

#### 3.1 概要

導出した運動方程式に基づき,積載物を一つ載せた場合についてシミュレーションと実験を行う.シミュレー



Fig. 5: Translational velocity



Fig. 8: Slipping locus (Experiment)

18.7[s]

18.5[s]

18.3[s]

ションでは,移動ロボットに Fig.3 に示すような等角加 速度の回転運動をさせ,積載物が滑る状況をつくり,搬 送台上を滑る移動軌跡を調べる.次に Fig.2 に示す実機 を用い走行実験を行い, Fig.4 のように搬送台上の積載物 の動きを撮影しその軌跡を確認する.それらの結果が一 致することを確認することによって,積載物の滑りを考 慮した移動ロボットのモデリングの検証を行う.

#### 3.2 結果と考察

シミュレーションと実験の結果を Fig.5~Fig.8 に示す. Fig.5, Fig.6 は移動ロボットの並進速度と角速度を表している.この結果では、シミュレーションと実験の結果がほぼ一致していることから、シミュレーションと実験で移動ロボットは同じ運動をしていることがわかる.また、並進速度がほぼ 0[m/s] で角速度が正比例の関係になっていることから、移動ロボットは初期位置を中心として等角加速度の回転運動を行っている.Fig.7, Fig.8 は積載物の滑った軌跡を示している.シミュレーション、実験の結果とも積載物は  $^{C}x$ 軸,  $^{C}y$ 軸それぞれ正方向に移動していることが確認できる.また、その移動軌跡も酷似している.以上のことから、このモデリングが妥当なものであるといえる.

## 4 移動ロボットの誘導制御

#### 4.1 瞬時目標を追従する誘導方法

本節では目標軌道へ移動ロボットを誘導する方法について述べる.まず,目標軌道は既知であり, $y_d(t) = f(x_d(t))$ とする.また,Fig.9に示すように,移動ロボットの位置を



Fig. 9: Relation between the mobile robot and the desired course



Fig. 10: Guidance traveling in time-series

 $P_t({}^{W}\!x_0(t), {}^{W}\!y_0(t))$ ,姿勢を ${}^{W}\!\theta_0(t)$ と表す.ここで,Pの添 え字tは現在の時刻を意味し, $P_{t+1}$ は $P(t+\Delta t)$ を意味す る.移動ロボットの位置  $P_t$ に基づいて,目標軌道上に瞬時 目標位置  $D_t({}^{W}\!x_d(t), {}^{W}\!y_d(t)) \stackrel{\triangle}{=} ({}^{W}\!x_0(t) + L, f({}^{W}\!x_0(t) + L))$ をとる.ここで,Lは誘導目標コース $(x_d(t), y_d(t))$ の空 間周波数に基づいて決定する定数である.

次に移動ロボットの時刻 t の位置  $P_t$  と目標位置  $D_t$  を 接点とし,移動ロボットの速度ベクトル  $V_0(t)$  を接線と する円 C を求める.  $P_t$  と目標軌道上の目標位置  $D_t$  に よって円の中心点  $C_t({}^Wx_c(t), {}^Wy_c(t))$  と半径  $r_c(t)$  が得 られる.この得られた円は移動ロボットが実際の時刻 tから  $t + \Delta t$  までの間に走行する瞬時曲線軌道として用い る.ここでは,目標コース上を走行するための目標速度  $V_{0d}(t)$  は,移動ロボットの走行を決定する上位タスクよ り運動計画に基づいて指示されるべきものであり,与え られているものとする.

また,次の制御周期においても同様に実際の移動ロボットの位置  $P_{t+1}$  と目標位置  $D_{t+1}$  より  $t + \Delta t$  から  $t + 2\Delta t$ 間を走行する新たな走行軌道が得られる.よって Fig.10に示すように各時刻における円軌道を用いた目標誘導曲線上を移動ロボットに走行させることによって目標軌道へと誘導させることができる.

本報告では目標位置 Dt の設定は誘導コースが x 軸方 向に伸びていることを仮定したが,そうでない方向に誘 導コースが設定されている場合であっても適当な座標変 換により上記の状態に変換できるので,この手法は様々 な設定のコースにも適応可能である. 移動ロボット上の搬送面と積載物の間に働く静止摩擦 力の大きさは

$$||^{W} \boldsymbol{f}_{S}^{*}|| = m_{S} \sqrt{(\dot{V}_{0} \cos \theta_{0} + a_{x})^{2} + (\dot{V}_{0} \sin \theta_{0} + a_{y})^{2}} \quad (18)$$

$$a_{x} = -V_{0}\dot{\theta}_{0}\sin\theta_{0} - \ddot{\theta}_{0}(^{0}x_{s}\sin\theta_{0} + ^{0}y_{s}\cos\theta_{0}) -\dot{\theta}_{0}^{2}(^{0}x_{s}\cos\theta_{0} - ^{0}y_{s}\sin\theta_{0})$$
(19)  
$$a_{y} = V_{0}\dot{\theta}_{0}\cos\theta_{0} + \ddot{\theta}_{0}(^{0}x_{s}\cos\theta_{0} - ^{0}y_{s}\sin\theta_{0}) -\dot{\theta}_{0}^{2}(^{0}x_{s}\sin\theta_{0} + ^{0}y_{s}\cos\theta_{0})$$
(20)

である.

#### 積載物を滑らさずに走行するための加速度は最大静止 摩擦力より次のように制限される.

$$||^{W} \ddot{\boldsymbol{P}}_{S}^{*}|| = \sqrt{(\dot{V}_{0} \cos \theta_{0} + a_{x})^{2} + (\dot{V}_{0} \sin \theta_{0} + a_{y})^{2}} < \frac{W f_{S,max}}{m_{s}}$$
(21)

ここで, 
$${}^{W}f_{S,max} = ||^{W}f_{S,max}||$$
である.従って,  
 $(\dot{V}_{0}\cos\theta_{0} + a_{x})^{2} + (\dot{V}_{0}\sin\theta_{0} + a_{y})^{2} < \frac{{}^{W}f_{S,max}^{2}}{m_{s}^{2}}$  (22)

が得られる.また,誘導走行時には移動ロボットの角速度,角加速度は従属的に決まり,誘導半径 $r_c(t) \ge V_0(t) = ||V_0(t)||$ を用いて次のように表される.

$$\dot{\theta}_0(t) = \frac{V_0(t)}{r_c(t)}$$
 (23)

$$\ddot{\theta}_0(t) = \frac{r_c(t)\dot{V}_0(t) - \dot{r}_c(t)V_0(t)}{r_c^2(t)}$$
(24)

式 (22) の不等式に式 (23), (24) を代入した状態で  $\dot{V}_0$  について解くと次式が得られる.

$$\dot{V}_{0,min}(r_c, \dot{r}_c, V_0) < \dot{V}_0 < \dot{V}_{0,max}(r_c, \dot{r}_c, V_0)$$
(25)

式(19) , (20) , (23) , (24) を代入し整理すると , 式(25)の加速度制限値はそれぞれ ,

$$\dot{V}_{0,max} = \frac{-\left(\frac{V_0 \dot{r}_c^0 y_S}{r_c^2} - \frac{V_0 \dot{r}_c (^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^3}\right) + \sqrt{D}}{\left(1 - \frac{2^0 y_S}{r_c} + \frac{^0 x_S^2 + ^0 y_S^2}{r_c^2}\right)}$$
(26)  
$$\dot{V}_{0,min} = \frac{-\left(\frac{V_0 \dot{r}_c^0 y_S}{r_c^2} - \frac{V_0 \dot{r}_c (^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^3}\right) - \sqrt{D}}{\left(1 - \frac{2^0 y_S}{r_c} + \frac{^0 x_S^2 + ^0 y_S^2}{r_c^2}\right)}$$
(27)

と表される.ここで,

$$\begin{split} D =& -\left\{\frac{1}{r_c^2} - \frac{2^0 y_S}{r_c^3} + \frac{2(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^4} - \frac{4^0 y_S^2}{r_c^4} \\ & - \frac{(^0 x_S - 1)^2}{r_c^4} - \frac{4^0 y_S(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^5} + \frac{(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)^2}{r_c^6}\right\} V_0^4 \\ & + \left\{\frac{2\dot{r}_c{}^0 x_S}{r_c^3} - \frac{2^0 x_S{}^0 y_S \dot{r}_c}{r_c^4} - \frac{2\dot{r}_c{}^0 y_S}{r_c^4} \\ & + \frac{2\dot{r}_c(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^5}\right\} V_0^3 - \left\{\frac{\dot{r}_c^2(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^4}\right\} V_0^2 \\ & + \left\{1 - \frac{2^0 y_S}{r_c} + \frac{(^0 x_S^2 + ^0 y_S^2)}{r_c^2}\right\} \frac{f_{S,max}^2}{m_S^2} \end{split} \tag{28}$$



Fig. 11: Relation between the mobile robot and the deseired couse

#### 4.3 加速度制限付き誘導制御

ー般的に移動ロボットの駆動系は,速度制御型のサーボ系を用いて減速機を組み込んだ構成であるため,移動ロボットの速度はサーボ系へ指示される目標速度に追従していると考えてよい.速度は制御周期 $\Delta t$ 秒毎に $V_{0d}(t)$ を離散値として指示されるが,時刻t直前の実際の速度を $V_0^-(t)$ ,直後の目標速度を $V_{0d}^+(t)$ と表すことにする.時刻tで, $V_{0d}^+(t)$ が指示された時に予定される加速度 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ は,近似的に

$$\dot{V}_{0d}^{+}(t) \coloneqq \frac{V_{0d}^{+}(t) - V_{0}^{-}(t)}{\Delta t}$$
(29)

と表される.式 (29) で得た予定の加速度  $\dot{V}^+_{0d}(t)$  と式 (26), (27) の加速度限界値を比較し,積載物を滑らさずにできるだけ速く走行するための加速度指令値  $\dot{\tilde{V}}^+_{0d}(t)$  を次式により決定する.

$$\dot{\tilde{V}}_{0d}^{+}(t) = \begin{cases} \dot{V}_{0,max} - \varepsilon & (\dot{V}_{0d}^{+}(t) > \dot{V}_{0,max} - \varepsilon) \\ \dot{V}_{0d}^{+}(t) & (\dot{V}_{0,min} + \varepsilon \le \dot{V}_{0d}^{+}(t) \le \dot{V}_{0,max} - \varepsilon) (30) \\ \dot{V}_{0,min} + \varepsilon & (\dot{V}_{0d}^{+}(t) < \dot{V}_{0,min} + \varepsilon) \end{cases}$$

ここで,  $\varepsilon$  は積載物を滑らさずに誘導走行する際の安定 性を増すために用いた値である.この  $\tilde{\tilde{V}}_{0d}^+(t)$ を用いて  $t \sim t + \Delta t$  秒間の新たな誘導制御出力速度  $\tilde{V}_{0d}^+(t)$  を求める.

$$\tilde{V}_{0d}^{+}(t) = \dot{\tilde{V}}_{0d}^{+}(t)\Delta t + V_0^{-}(t)$$
(31)

この誘導制御出力速度 $\tilde{V}^+_{0d}(t)$ を用いて目標軌道を走行するための左右車輪指示速度を決定する.

$$\tilde{V}_{ref,i}^{+}(t) = \frac{1}{r_c} (r_c \pm \frac{T}{2}) \tilde{V}_{0d}^{+}(t) , (i = R, L)$$
(32)

## 4.4 直線の走行

Fig.11 に表すように,目標曲線軌道の右カーブと左カー ブが切り替わる際に,ごくわずかな時間,直線軌道になる.このときに瞬時曲線軌道円Cの半 $2r_c$ が一時的に 無限大となり,加速度制限値 $V_{0,max}$ , $V_{0,min}$ の計算が不 連続になってしまう.これを解決するために,円Cの半 径 $r_c(t)$ がある値以上大きくなった時には,左右車輪速度 を一定にして,目標軌道コースを瞬間的に直線として与 えて走行する.その式を以下に示す.

$$\bar{V}_{i}^{+}(t) = \begin{cases} \tilde{V}_{ref,i}^{+}(t) & (r_{c} < H , i = R, L) \\ \tilde{V}_{0d}^{+}(t) & (r_{c} \ge H , i = R, L) \end{cases}$$
(33)

このとき H は目標軌道によって異なる.

4.5 停止アルゴリズム

加速度制限をしていても停止のときに急ブレーキをかけていたのでは、その衝撃で積載物が滑ってしまう可能性があり、加速度制限の意味がなくなってしまう.

そこで,移動ロボットを停止させるために,途中から 加速度をマイナスの値にして移動ロボットを徐々に減速 させていき,スムーズに停止させる.停止処理は加速度 制限とは無関係に実行するため, $\dot{V}_{0,max}$ , $\dot{V}_{0,min}$ の制限 を行わない.

## 5 シミュレーションおよび実験

## 5.1 曲線コースにおける加速度制限

提案手法の有効性を確認するために Fig.12 に示すよう な,目標曲線コース  $y_d(t) = k(1 - \cos \omega x_d(t))$ を与え, 加速度に制限を付けない場合と付けた場合の誘導走行シ ミュレーションおよび実機による実験を行った.ここで, k = 0.4,  $\omega = 2\pi/T$ , T = 1.1とする.また,図中に示 した点 *Slip* は制限を付けない場合に積載物が滑り出した 地点を表している.加速度制限による限界値への置き換 えは式 (30) に従って行い,積載物の滑りを防ぐ目標加速 度として出力する.

この時,移動ロボットの初期位置は ( ${}^{W}x_{0}(0), {}^{W}y_{0}(0)$ ) = (0,0) で,姿勢は  ${}^{W}\theta_{0}(0) = 0$  である.目標速度は  $V_{0d}(t) = \dot{V}_{0d} t[m/s]$ とし, $\dot{V}_{0d} = 0.03[m/s^{2}]$  である.また,積載物 を滑らさずに誘導制御を安定に行うための値である  $\epsilon$ は  $0.1[m/s^{2}]$ とした.加速度制限を付けた場合には t = 15.5 秒,加速度制限を付ない場合は t = 8.0 秒で停止のため の加速度  $\dot{V}_{0d} = -0.04[m/s^{2}]$ に切り替わる.これは,加速度制限を付ける実験では 2 つのカーブを走行し,加速度制限を付けない場合では 1 つのカーブを走行し停止することになる.また摩擦係数は  $\mu = 0.12278$ とする.

まず, Fig.13 に加速度制限を行わなかった場合の移動 ロボットの走行軌跡, Fig.17 に加速度制限を行った場合 の移動ロボットの走行軌跡を示す.走行距離が異なるが, 1 つめのカーブだけを見ると,加速度制限を行わなかっ た場合と加速度制限を行った場合の両方とも走行軌跡は ほぼ同じであることがわかる.これは,加速度制限の有 無に関係なく第4章で示した誘導が行われているためで あり,かつ積載物の滑りによる影響が微小なためである.

次に,加速度制限を行わなかった場合の結果について 考察する.Fig.14に加速度制限を行わなかった場合の最 大加速度 $\dot{V}_{0,max}$ と加速度指令値 $\dot{\tilde{V}}_{0d}^+(t)$ ,Fig.15に誘導 制御出力速度 $\tilde{V}_{0d}^+(t)$ と実際の速度 $V_0(t)$ ,Fig.16に搬送 台上の積載物の様子を示す.それぞれ (a) がシミュレー ション,(b) が実験の結果を示している.まず,Fig.15 か ら停止のための加速度に切り替わるt = 8.0秒までの間 は等加速度で走行していることがわかる.次にFig.14 を



Fig. 12: Experiment image

見ると, t = 7.74 秒で加速度指令値  $\tilde{V}_{0d}^{+}(t)$  は積載物が滑らない最大の加速度  $\dot{V}_{0,max}$  を超えている.そのため,加速度制限を行わない場合には,t = 7.74 秒に積載物は滑り始める.Fig16 からも積載物が滑り出す時間がt = 7.7 秒からt = 7.8 秒の間で,Fig.14 のデータとほぼ一致していることがわかる.また Fig16 では積載物が滑って搬送台上から落ちてしまい,ロボットが積載物を轢きそうな状況になり危険である.

次に,加速度制限を行った場合の結果について考察す る.Fig.18に加速度制限を行った場合の最大加速度 V<sub>0.max</sub> と加速度指令値  $\dot{ ilde{V}}^+_{0d}(t)$ , Fig.19 に Fig.18 の A の部分, Fig.20 に Fig.18 の B の部分, Fig.21 に誘導制御出力速度  $ilde{V}_{0d}^+(t)$ と実際の速度  $V_0(t)$ , Fig.22 に搬送台上の積載物の 様子を示す.それぞれ (a) がシミュレーション, (b) が実 験の結果を示している. Fig.18より,最大加速度 V<sub>0.max</sub> の減少と共に,加速度指令値 $\dot{\tilde{V}}_{0d}^+(t)$ も最大加速度 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ を超えないように減少し,加速度制限が働いている.こ こで,最大加速度 V<sub>0,max</sub> が変化する原因として,式 (25) に示す解の中にある走行の曲率半径 rc, 曲率半径の変化 量 $\dot{r}_c$ ,走行速度 $V_0$ が変数として働くためである.つまり, 許容範囲である最大加速度 $V_{0,max}$ をある定数として設定 するのではなく,走行速度や走行軌道の曲率の影響を受 けて変化する状況で,各時刻において最大加速度 V<sub>0.max</sub> を式 (26) によって計算し,境界とするためである.また Fig.21より,加速度制限が働いている時には加速度指令 値  $ilde{V}_{0d}^{+}(t)$  が負の値になるため,その間は速度  $V_{0}(t)$  が減 少していることが確認できる.また Fig.19 と Fig.20 を 比較すると,実験結果とも2つ目のカーブを曲がる際の Fig.20 の方が最大加速度 V<sub>0.max</sub> の減少の幅が大きい.こ れは Fig.21 から分かるように加速度制限が働く前の速度 が1つ目のカーブの時よりも速いため,より減速を必要 とするためである.加速度制限を行わなかった場合と違 い,加速度制限を行った場合には,加速度指令値 $\tilde{V}_{0d}(t)$ が最大加速度 V<sub>0.max</sub> を超えないため, 積載物は滑らな い. Fig.22 からも実際に移動ロボットが積載物を滑らせ ず,安全に走行できていることがわかる.

以上の結果より,本提案手法の有効性が確認できた.

#### 5.2 Lの影響

4.1 節で示した定数 L が本手法の加速度制限つき誘導 制御法にどのような影響を与えるかをシミュレーション を用いて確認する.目標軌道は  $x_d \leq 1.0$  の時,  $y_d = x_d$ ,  $x_d > 1.0$  の時,  $y_d = -x_d + 2.0$  とし, Fig.23 のような直



角コースを設定した.角を曲がりきったt = 11.0秒以降 は停止のための加速度に切り替わる.定数Lの値をそれ ぞれL = 0.1,L = 0.2,L = 0.3と変更し,その他の条 件は5.1節と同様にする.

Fig.24 |C L = 0.1 , Fig.25 |C L = 0.2 , Fig.26 |C L =0.3 の場合のシミュレーション結果を示す. また Fig.24, Fig.25, Fig.26, それぞれの(a) は移動ロボットの走行軌 跡,(b)は最大加速度 $\dot{V}_{0,max}$ と加速度指令値 $\tilde{V}_{0d}^{+}(t)$ を示 している.それぞれの(a)の結果について比較すると,L の値が増すごとに目標軌道への誘導の精度が低くなるこ とがわかる.つまり角を曲がる際には L の値が増すごと によりゆるいカーブを走行していることになる.次にそ れぞれの (b) の結果について考察する.まず, Fig.24(b) を見ると,t = 9.35秒から最大加速度 $\dot{V}_{0,max}$ の値が1.0となっている.これは今回,最大加速度 $V_{0 max}$ の計算式 である式 (26) の D が負になった際に  $\dot{V}_{0,max} = 1.0$  と設 定したためである.したがって,t = 9.35秒からは最大 加速度 V<sub>0.max</sub> の計算が出来ていないことになる. そのた め,加速度制限は働かず積載物を滑らせてしまう.次に Fig.25(b) を見ると, Fig.24(b) に見られたような最大加 速度  $V_{0,max}$  の計算が出来ていない箇所がなく,t=9.03秒から t = 9.33 秒までの間で加速度指令値  $\tilde{V}_{0d}(t)$  が最 大加速度 V<sub>0.max</sub> を超えないように減少し,加速度制限 が働いていることがわかる.最後に Fig.26(b)を見ると, Fig.25(b) 同様に最大加速度  $\dot{V}_{0,max}$  の減少は見られるが, 加速度指令値 $\dot{\tilde{V}}_{0d}^+(t)$ の値にまで減少しないため加速度制 限が働くことなく走行を終える.これは先に述べた通り, L = 0.2 の時よりもゆるいカーブを走行しているためで ある.

以上より, L の値を大きくすれば最大加速度 V<sub>0,max</sub>の 計算が出来ない箇所が無くなるが,目標軌道への誘導の 精度が低くなるといえる.

#### 5.3 直角コースにおける加速度制限

5.2 節と同様の目標軌道を与え,シミュレーションと実験を行った.今回,5.2 節の結果を踏まえてL = 0.24とし,その他の条件は5.2 節と同様にする.

シミュレーションと実験の結果を Fig.27, Fig.28, Fig.29 に示す.Fig.27 は目標軌道と移動ロボットの軌跡, Fig.28 は最大加速度 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ と加速度指令値 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ , Fig.29 は誘導制御出力速度 $\tilde{V}_{0d}^+(t)$ と実際の速度 $V_0(t)$ を表している.また,それぞれ(a)がシミュレーション,(b)が実験の結果を示している.Fig.27 より,移動ロボットは直角の目標軌道を追従できていることがわかる.またFig.28 より,t = 9 秒あたりで加速度指令値 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ が最大加速度 $\dot{V}_{0,max}$ を超えないように減少し,加速度制限が働いている.さらにFig.29 より,加速度制限が働いている時には加速度指令値 $\dot{V}_{0d}^+(t)$ が負の値になるため,その間は速度 $V_0(t)$ が減少していることが確認できる.

以上の結果より,目標軌道で直角コースを与えても提 案手法が有効であることが確認できた.





Fig. 29: Translational velocity

### 5.4 鋭角コースにおける加速度制限

目標軌道を  $x_d \leqq 1.0$  の時 ,  $y_d = x_d$  ,  $x_d > 1.0$  の時 ,  $y_d = -2x_d + 3.0$  とし, Fig.30 のような鋭角コースを設 定し,シミュレーションと実験を行った.今回,5.2節 の結果を踏まえてL = 0.25とし,その他の条件は5.2節と同様にする.Fig.31 に目標軌道と移動ロボットの軌 跡, Fig.32 に最大加速度 $V_{0,max}$ と加速度指令値 $\tilde{V}_{0d}(t)$ ,  $\operatorname{Fig.33}$ に誘導制御出力速度 $\widetilde{V}_{0d}^+(t)$ と実際の速度 $V_0(t)$ を 示す.また,それぞれ(a)がシミュレーション,(b)が実 験の結果を示している . Fig.31 から , 移動ロボットは少 しオーバーラン気味に走行しているものの,鋭角コース を曲がれていることがわかる.また Fig.32 より, t = 9秒のあたりで加速度制限が働いていることが確認できる. さらに, 直角コースよりも曲がる角度が鋭いため, Fig.28 より最大加速度 $V_{0,max}$ の減少が大きく,加速度制限が大 きく働いている. Fig.33 からも速度 V<sub>0</sub>(t) の減少がはっ きりとわかり,加速度制限が働いている様子がわかる.

以上の結果より,目標軌道で鋭角コースを与えても提 案手法が有効であることが確認できた.

## 6 結言

本報告は移動ロボットが目標軌道をできるだけ速く走 行する加速度制限付最速誘導制御法を提案した.また, 4.1節で示した定数 L が本提案手法にどのような影響を 与えるかをシミュレーションを行い考察した.さらに本 提案手法の有効性をシミュレーションと実験によって確 認した.



Fig. 33: Translational velocity

## 参考文献

- [1] 矢崎靖啓,池田毅,竹内元哉,見浪護:PWS 型移
   動ロボットの加速度制限付き最速誘導制御;日本ロ ボット学会誌, Vol.25, No.4, pp.535-544 (2007.5)
- [2] 池田毅, 竹内元哉, 浪花智英, 見浪護: 積載物の滑りを 考慮した移動ロボットのモデリングと走行実験;日 本機械学会論文集(C編), Vol.70, No.699, pp3227-3235(2004.11)
- [3] 河野寿之,神田真司:高齢者・障害者用食事搬送自 動ロボットシステム;日本ロボット学会誌,Vol.16, No.3, (1998),317-320.